

- 保育園児、幼稚園児それぞれへの配慮（経験が違う・子どもの受け止め方が違う・保育園・幼稚園の成り立ちの違いをきちんとは把握して対応していかないといけない）
- 保育園児・幼稚園児それぞれの保護者への配慮
- 親子行事について（親子行事に幼稚園の親は参加しやすいが、保育園の親は参加したくても仕事を休めない親が大勢いる。それにも関わらず呼びかけることに対して、）

一方で、“一体型の園”の場合には、保育上の違いはないが、幼稚園の親からの不満がある。例えば、「遅くまで預かってもらわなくていいから幼稚園の保育料を安くして欲しい」という意見も多く、お昼寝をすることへの不満な親もいる。また保育所の親も研修会等で特別保育になることを不満に感じている人もいる。

保育園の親は『参加してやれない』という負担があるのでは、と思う。」

2) 保護者の意見

この質問は、保育者のみで、保護者の意見は尋ねていない。

3) 保育者の負担に影響を及ぼすファクター

これを表2の分析軸（p 54 参照）を用いてクロス分析をしたところ、グループ間に20ポイント以上の開きがみられた項目は、次の通りであった。つまり、この項目が保護者同士の関係に影響を及ぼすファクターとして考えられよう。

i. 幼稚園児の保育時間

保育者の意見について、幼稚園児の保育時間別（分析軸d）に保育者の負担感の関係を分析した結果が図71である。「1.負担が重くなる」「2.どちらかといえば負担が重くなる」を合わせた数値をみると、“早帰り型”68.0%、“預かり保育型”53.9%、“一体型”40.0%、であり、“早帰り型”が“一体型”に比べて28ポイント高くなっている。

「5.負担が軽くなる」「4.どちらかといえば軽くなる」を合わせた数値を見ると、“一体型”0%、“早帰り型”3.9%、“預かり保育型”0%となっている。こちらは明確な相違ではないが、保育園児と幼稚園児の基本保育時間が一体の園が僅かに高くなっている。

すなわち、幼稚園児が常に昼食後まもなく（13時30分～2時）降園する“早帰り型”の園は、幼稚園児の基本保育時間帯が保育園児と同様の8時間になっている“一体型”園に比べて、合同保育によって保育者の負担が重くなると感じている保育者が多くなっている。一体型の園では幼稚園児も保育園児と同様の保育時間なので、夕方まで保育する子どもの数は多くなるが、2つのタイプの保育をするよりも、同じ保育時間の方が保育者の負担が軽いと感じているようである。

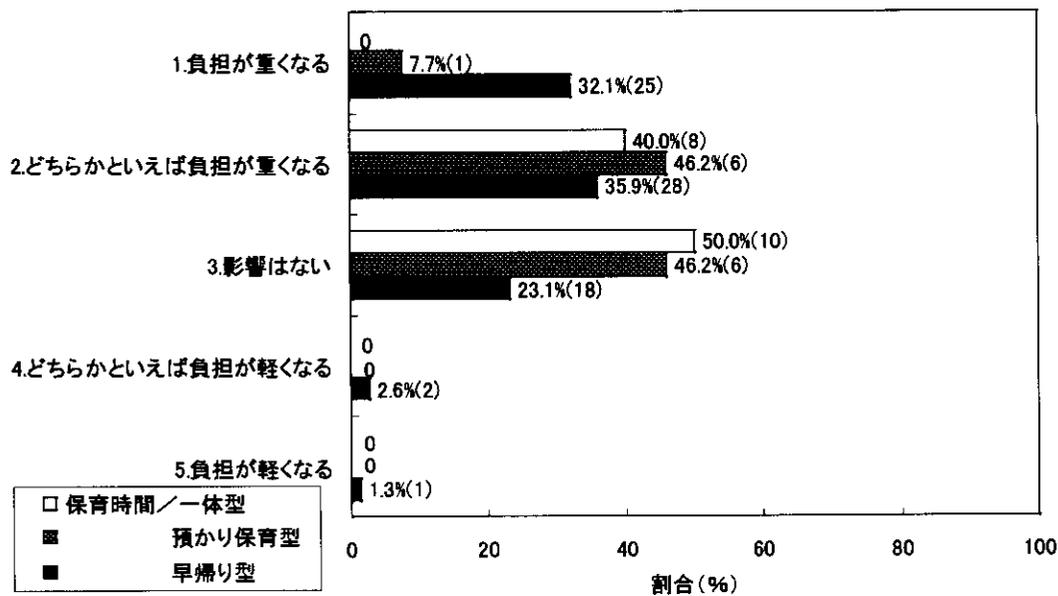


図71 保育時間別〈d〉保育者の負担 (保育者の意見)

ii. 親の子育てへの関心度

保育者の意見について、親の子育てへの関心度別（分析軸g）に保護者同士の関係を分析した結果が図72である。「1.負担が重くなる」「2.どちらかといえば負担が重くなる」を合わせた数値をみると、“関心が低い”78.6%、“中間”61.1%、“関心が高い”55.8%の順となっており、“関心が低い”園が“関心が高い”園に比べて23ポイント高くなっている。逆に「5.負担が軽くなる」「4.どちらかといえば軽くなる」を合わせた数値をみると、“関心が高い”4.6%、“中間”1.9%“関心が低い”0%、の順となっており、明確な相違ではないが、“関心が高い”が“関心が低い”に比べて僅かに高くなっている。

すなわち、親の子育てへの“関心が低い”園の方が、“関心が高い”園よりも、合同保育による保育者の負担感が重い傾向にある。

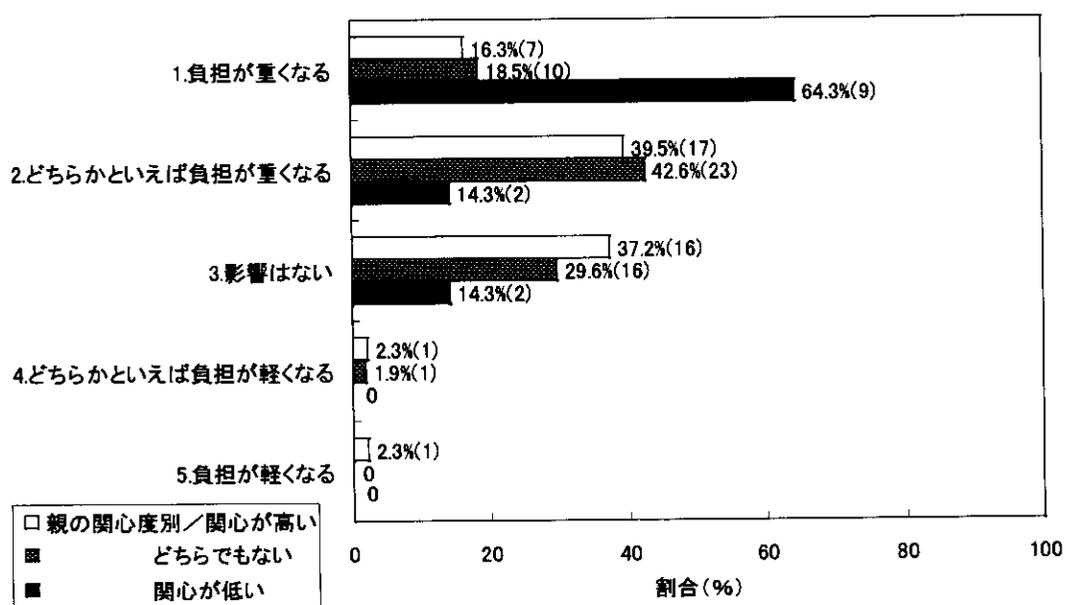


図72 親の関心度別 (g) 保育者の負担 (保育者の意見)

(7) 合同保育の評価

①園長・主任の評価

1) 合同保育の良かった点

園長（または主任）に「合同保育を実際に行って良かった点（A票-Q22）」について尋ねたところ、複数回答の結果が図73である。「保育園児と幼稚園児とが仲良くなった」が最も多く75.0%、「保育所と幼稚園の保護者が仲良くなった」68.8%、「研修の共通化や配置転換ができるなど、保育者の管理上のメリットがあった」56.3%、「園児が増えた」50.0%、「集団規模が大きくなった」50.0%の順になっている。

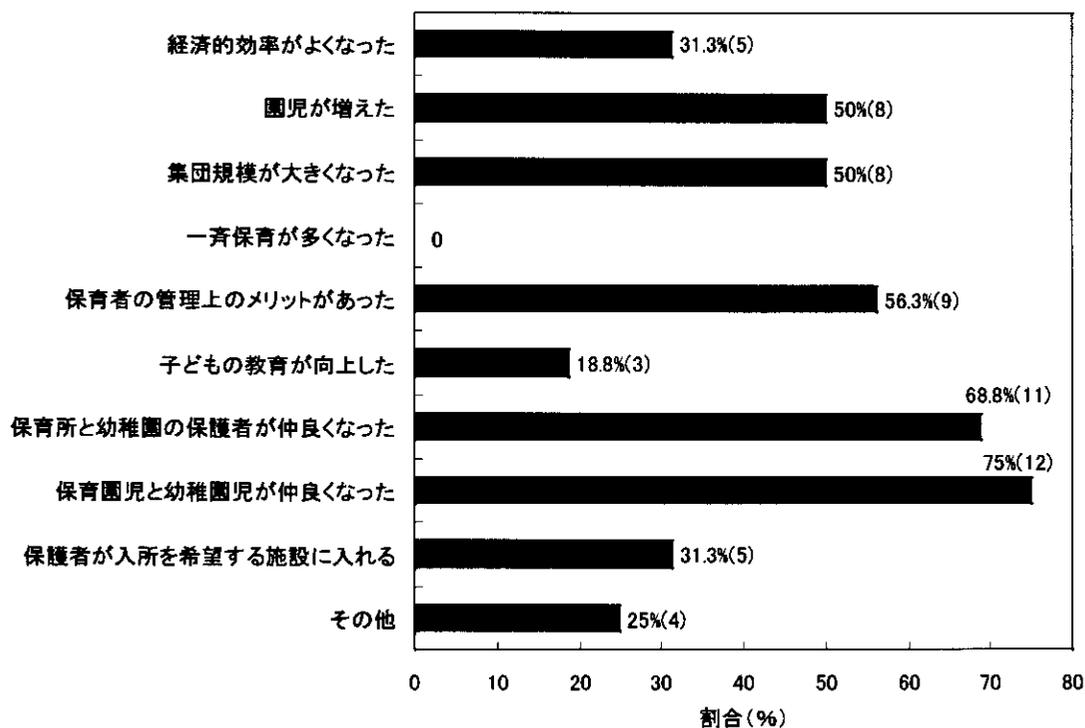


図73 合同保育の良かった点（園長・主任の意見）（複数回答）

そのうち最も良かった点1つを選択した結果が、図74である。「保育園児と幼稚園児とが仲良くなった」37.5%となっている。

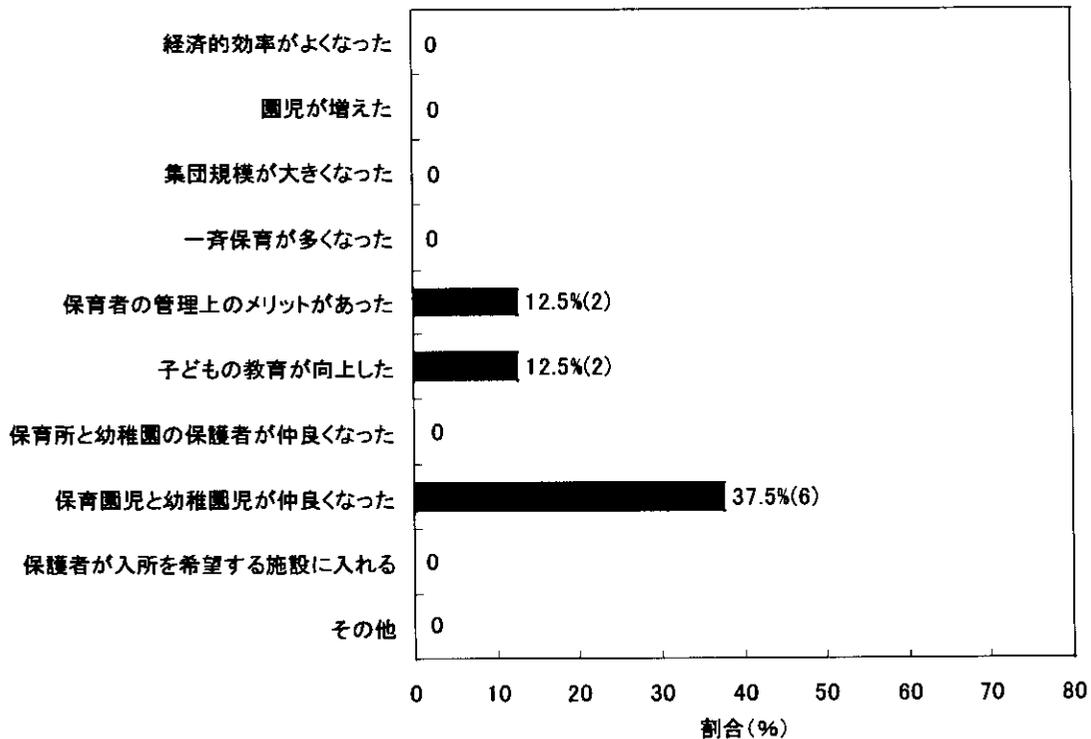


図74 合同保育の良かった点（園長・主任の意見）（1つ）

0

2) 合同保育の気になる点

園長（または主任）に「合同保育を実際に行って気になる点（A票-Q23）」について尋ねたところ、複数回答の結果が図75である。「幼稚園教諭への負担が増した」が最も多く43.8%、「集団規模が大きくなった」37.5%、「保育所の保育士への負担が増した」31.3%、「園の運営管理が大変になった園児が増えた」31.3%、「保育園児の情緒への気になる影響がある」25.0%、と続く。

そのうち最も気になった1つの結果が、図76である。「集団規模が大きくなった」18.8%となっている。

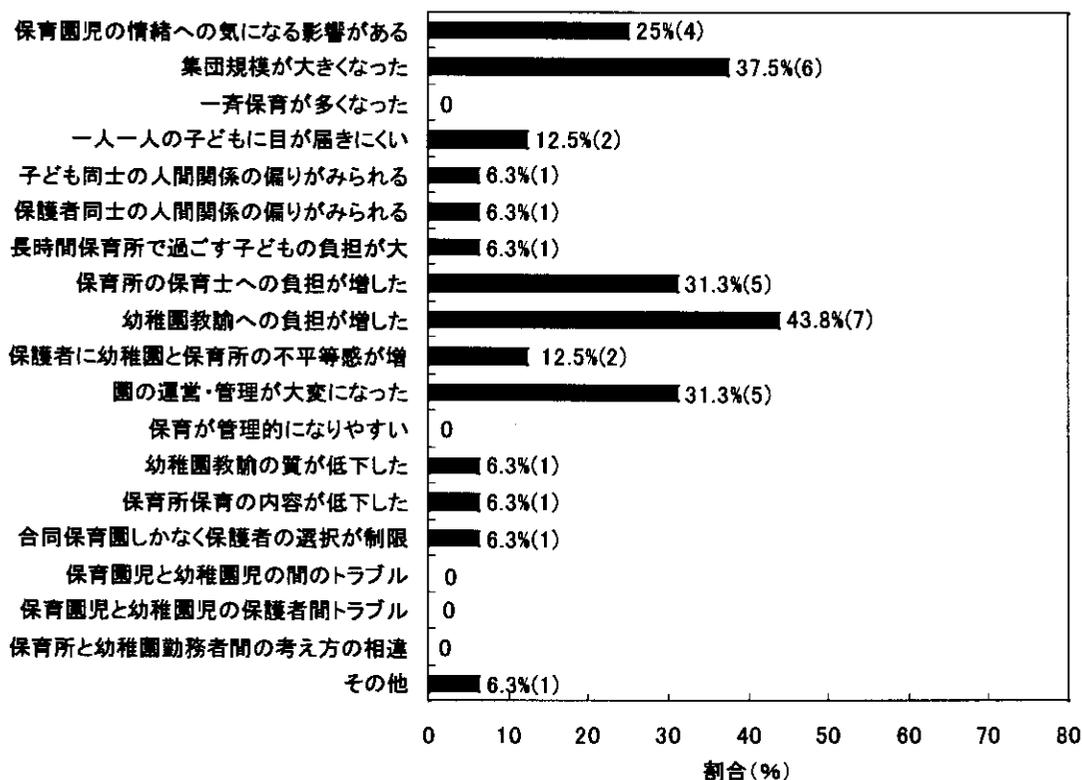


図75 合同保育の気になる点（園長・主任の意見）（複数回答）

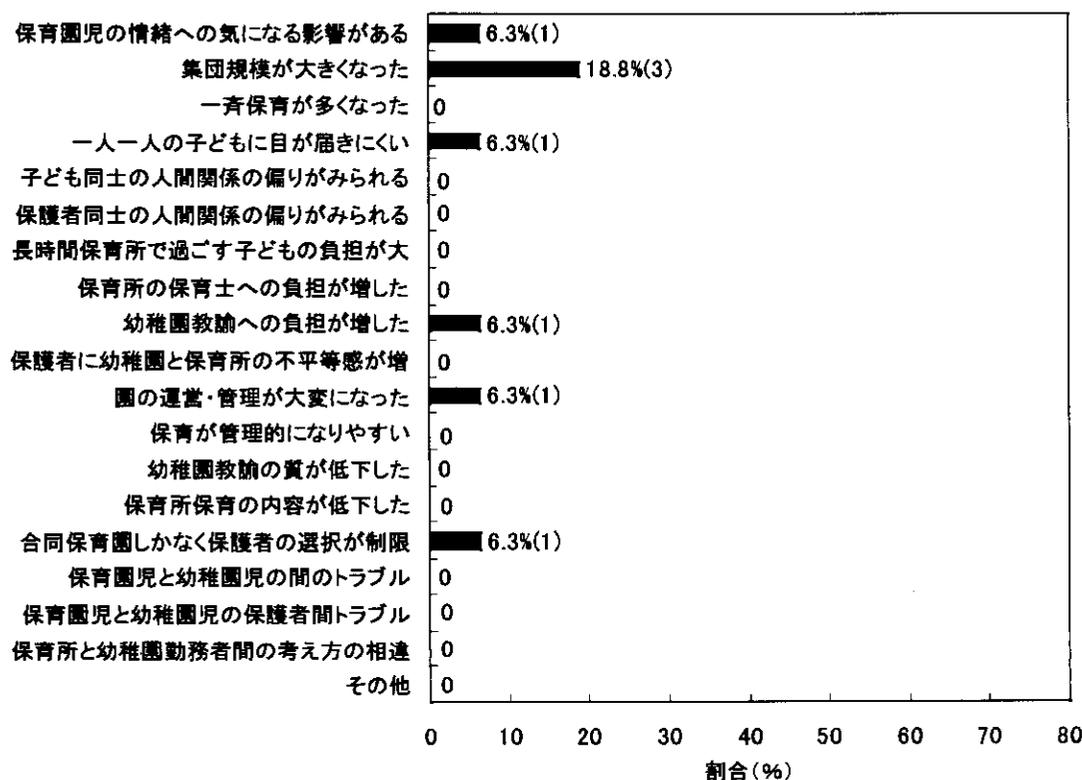


図76 合同保育の気になる点（園長・主任の意見）（1つ）

②保育者の評価

1) 合同保育の評価

保育者に、「合同保育について、全体的にどのようにお感じですか (C 票- Q21)」と尋ねたところ図 77 の結果を得た。

「1.悪い影響がある」「2.やや悪い影響がある」を合わせた数値は、2.7%となっている。「3.どちらともいえない」が 45.0%、「5.良い影響がある」「やや良い影響がある」を合わせた数値は、37.8%である。

すなわち、「どちらともいえない」が最も多く、1/3強が「良い影響がある」としている。「悪い影響がある」は僅かだがそう評価する保育者もいる。

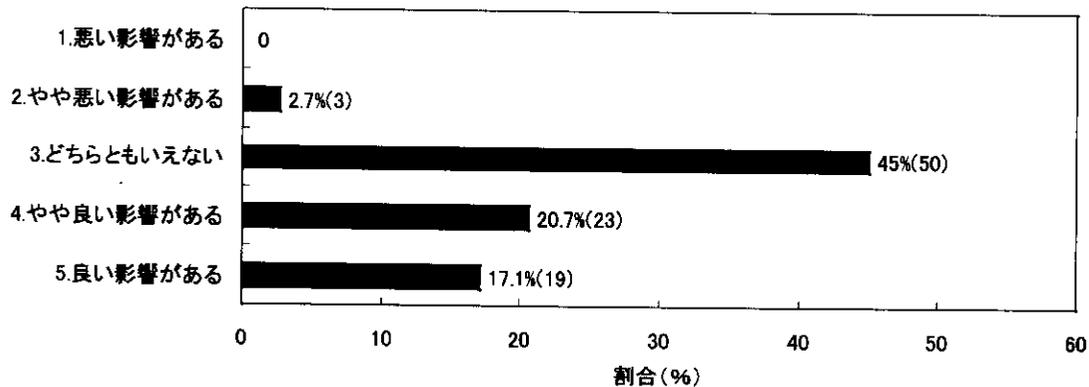


図77 合同保育の影響 (保育者の意見)

2) 合同保育に対する配慮・意見

上記の気になる点についてどのような配慮をしているか、あるいは保育者が合同保育についてどのように考えているか、前者は園長・主任に、後者は保育士に自由回答で尋ねた。両者は重なる意見が多くなっているため、次のように共通に整理した。

i) 保育園児に対する家庭的な保育や配慮

- 残る子どもにできるだけ精神的な負担がかからないように、より家庭的な雰囲気楽しく過ごせるよう、保育内容・職員間の配置等心がけている。
- 早く帰る子どもの姿が目につかないよう配慮

ii) 適正な集団規模

- 過疎化の進む地方においては、園児数が減少し、合同保育をしても集団としての機能が充分果たしきれない現状がある。

○人数により合同にして効果的な場合と、集団が大きすぎて効果が上がらない場合もある。

iii) 保護者の理解・連携

○保護者間・子ども間での人間関係の偏りが見られるが、別々の施設であれば全く出会う機会がない両者が知り合ってお互いを理解し合える貴重な場であることを大切にし、保護者の方にも理解を求めている。

○保育園児の保護者が時間的に余裕がない分、幼稚園児の保護者が手をさしべてくれている。

○保護者との連携をよくするように努め、つまらぬトラブルにならぬよう努めている。

○保護者には理解しにくい面もあるようなので、理解を得る努力が必要。

○保護者に子どもについて質問されたときに、幼保かけもちの上、保育者が複数にわたって保育をしているので、わかりづらい面がある。

○近年の保育状況（低年齢児の入所、延長保育の増員、父親の遅い帰宅時間、働く理由として身分以上の生活保障を得るために家庭を犠牲にしていることが最も多い）に対して、保育する側の人数・良い保育にも限度がある。子どもを家庭に返してあげたい、が私たち保育者の本音でもある。

iv) 保育者の勤務体制の工夫・保育士と幼稚園教諭の連携

○幼稚園教諭が勤務ローテーションに加わり、職員の負担軽減を図っている。

○1クラスに保育士と幼稚園教諭がいるので、毎日の保育には細部にわたっての共通理解が必要

○幼稚園教諭と保育士の信頼関係の基に、「気持ちを一つ」にお互いに協力し、助け合う

○入園当初は特に、担任が途中で交代せず、一日同じ担任が保育することで寂しい思いをしないようにしている。

○幼稚園児が降園する間は、代替職員がはいり、保育園児の保育（午睡前の絵本の読み聞かせ、午睡準備等）を行っている。

○幼保の職員の勤務形態が違うので、保育園児が降園してから勤務時間外で話し合いをすることになる。職員会を分けたり、臨時職員を入たりして、時間内に済ませるようにして保育士の負担軽減を図っている。

○子どもが長時間いる雑然とした中ではなく、静かな環境の中で明日への保育に臨むことが適当と考え、幼稚園児降園後は保育園児は保育園舎に移って生活し、幼稚園舎には子どもがいなくなるようにしている。

○待遇・制度・勤務体制が異なる保育士と幼稚園教諭が一緒に保育していくことは大変であり、感情的不満もある。

○職員が最初から同一立場で何もかも同じなので、保育所・幼稚園の所属意識が生まれ

ない分、平等に保育教育している。

v) 二重負担でゆとりがない

- 1日の中での数回にわたる生活リズムの変化など、職員全員があらゆることに関わるため、とても忙しさを感じ、ゆとりある生活がとりにくくなっている。
- 行政面の二元制のため、財政・事務面で苦労がある。

vi) 幼保一元化についての意見

〈メリット〉

- 合同保育を行って長年になるので、「気になる点」については多少の思いはあるが、あまり感じなくなった。
- 幼保一元化は開所時より行っているので、比べるものがない。
- 幼保一元化を開始してから長い、あるいは幼保一元化で出発したため、前向きに解決してきていて、問題はない。望ましい保育のあり方をさらに深めていきたい。
- 子どもにとっては、幼保の区別なく、育っていくことは多くのメリットがある困難
- 異年齢児との関わりができ、相手を思いやるやさしい心が自然に育っている

〈困難〉

- 開園してすでに20年が経過しているため地域には幼保一体化の施設が定着しているが、転入者は保育所・幼稚園を選択できず、全員合同保育実施園で受け入れることに戸惑いを感じている。
- 保育園・幼稚園のそれぞれの良さがあるので、なかなか一つにできない。

vii) その他（幼稚園との関係）

- 幼稚園児も保育所で給食を作り、保育園児と同じ食事をしている。
- 幼稚園として運営し、できるだけ一本化している。
- 幼稚園で延長保育をする場合は、その時間も含めた1日のディリープログラムを作成すべき。
- 地方財政はどこも苦しく、施設を2つ維持していくのは大変である。幼児施設は1施設ですむ方向に、国の方針を早急に進めるべきではないか。

③保護者の評価

1) 合同保育の評価

保護者に「保育園児と幼稚園児とが一緒に保育を受けていることは、お子さんにどのような影響を与えているとお感じですか (D 票- Q13)」と尋ねたところ、図 78 の結果を得た。

「1.気になる影響がある」「2.やや悪い影響がある」を合わせた数値は、17.5 %、「3.影響はない」57.0 %、「5.良い影響がある」「やや良い影響がある」を合わせた数値は、20.6 %である。「影響がない」と考えている保護者が最も多く、半数を超えている。「良い影響がある」は、保育者に比べて 17 ポイント低く、逆に「悪い影響がある」は、15 ポイント高くなっている。

すなわち、「影響がない」が最も多く、次に良い影響がある、最も低いのが「悪い影響」という順は保育者と同様であるが、割合をみると、保護者の評価は保育者に比べて低くなっている。

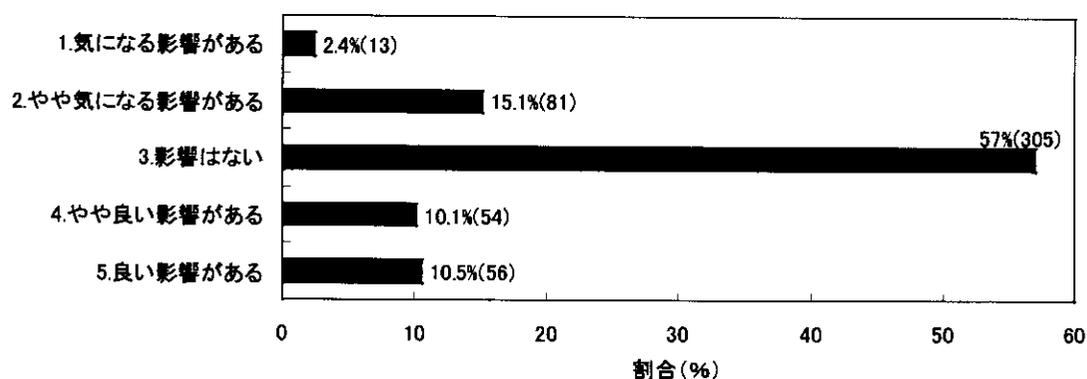


図78 保育者の評価

2) 保護者の評価に影響を及ぼすファクター

これを表 2 (p 54 参照) の分析軸を用いてクロス分析をしたところ、グループ間に 20 ポイント以上の開きが見られた項目は、次の通りであった。つまり、この項目が保護者の合同保育に対する評価に影響を及ぼすファクターとして考えることができよう。

i. 地域の特性

園の所在する地域の特性別 (分析軸 f) に保護者の評価を分析した結果が図 79 である。

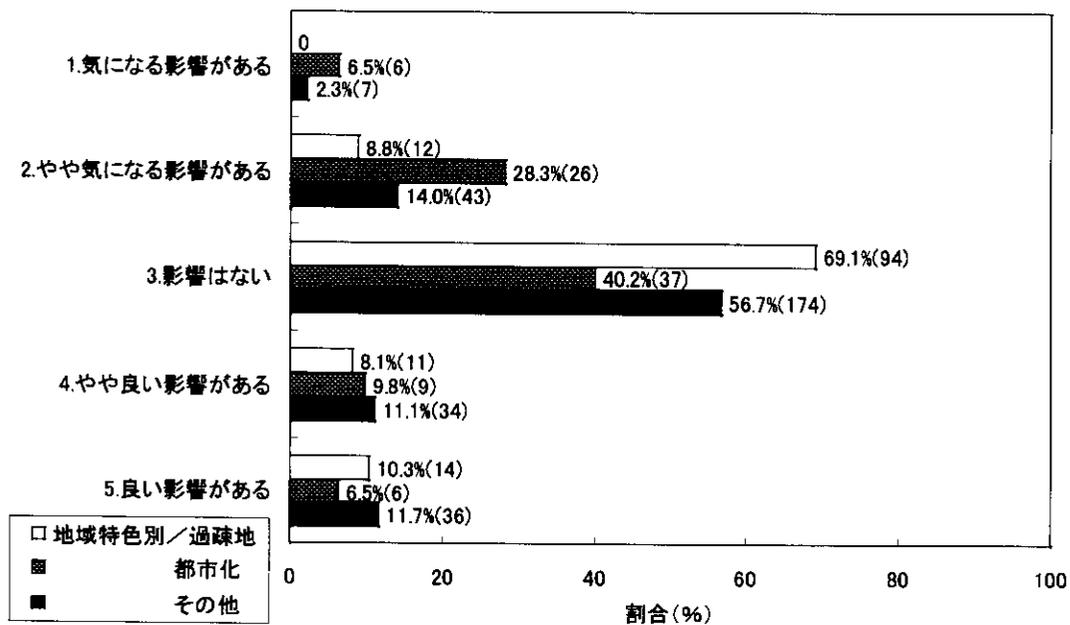


図79 地域の特性別〈f〉保護者の評価

「1.気になる影響がある」「2.やや悪い影響がある」と回答した者を合わせると、“都市化” 34.8%、“過疎地” 8.8%、と、“都市化”が26ポイント高くなっている。「3.影響はない」は“過疎地” 69.1%、“都市化” 40.2%であり、“過疎地”が29ポイント高くなっている。「5.良い影響がある」「4.やや良い影響がある」と回答した者を合わせると、“過疎地” 18.4%、“都市化” 16.3%で、僅かだが過疎地が上回っている。

すなわち、“過疎地”にある園は「良い影響がある」という評価が「気になる評価」を上回っているが、“都市化”が進む地域にある園では、“気になる影響”の方が高くなっている。さらに「悪い影響」を比べると、“都市化”が進む地域にある園の方が“過疎地”の園よりも高くなっている。

トータルにみると、“過疎地”地域にある園の方は肯定的な評価を得ているが、「都市化」が進む地域の園は否定的な評価の方が高いといえよう。

3) 保育者が感じている保護者の満足度

保育者に「合同保育について、保育園児の保護者はどのように感じているとお感じですか (C票-Q18)」と尋ねたところ、図80の結果を得た。「1.満足している」「2.どちらかといえば満足している」36.0%、「3.どちらともいえない」50.5%「5.不満である」「4.どちらかといえば不満である」2.7%となっている。

しかし、これを先ほどの保護者自身の評価と比べたとき、「満足」20.6%「どちらでもない」57.0%、「不満」17.5%であり、実際の保護者の評価は保育者が感じているよりも、少し低い傾向にあるということがわかる。

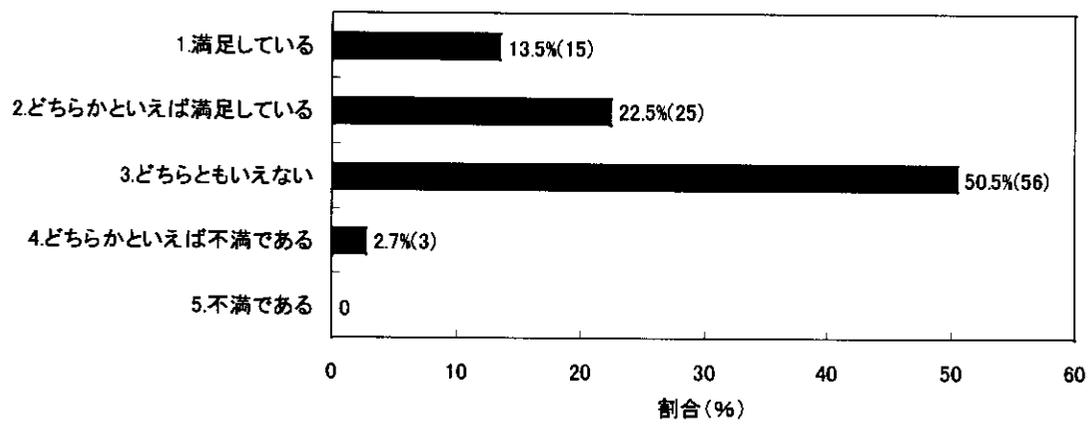


図80 保護者の満足度（保育者の意見）

3. 考察

ここでは「合同保育」が子ども、保護者、保育者に及ぼす影響と、その要因についてについて、アンケート調査の数値に保育者・保護者の自由回答を加え、さらにケーススタディの結果も参考にしながら、考察を進めていくこととする。

なお、クロス分析によってこれらの関係に影響を及ぼすファクターを抽出したが、これについてはファクターを列記するにとどめ、「V. 考察」において改めて検討する。

(1) 子ども同士の関係

園長・主任の回答では、合同保育の最も良かった点として「保育園児と幼稚園児が仲良くなった」ことが挙げられているが、一方で保護者の半数、保育者の1/3が保育園児同士・幼稚園児同士で「固まりがち」と回答している。保育者は「固まることはない」という意見が「固まりがち」を上回っているが、保護者は逆に「固まりがち」という意見の方が多い。

なお、クロス分析によって、保育園児同士、幼稚園児同士で「固まりがち」が多くなるファクターとして、i) 子どもの集団規模が大きい、ii) 幼稚園児の割合が多い、iii) 幼稚園児が常に早く帰る、iv) 保育園と幼稚園の保育者が別々の勤務体制、v) 都市化が進む地域、を抽出した。

① 合同保育の良い影響と気にかかる点

1) 良い影響

「合同保育を行って良かった点」(A 票-Q22)を園長・主任に尋ねたところ、「保育園児と幼稚園児が仲良くなった」ことが最も高くなっていた(p 127, 図 73 参照)。また保護者に自由回答で「合同保育が子どもに与える良い影響」について尋ねたところ((D 票-Q14)、「地域の子どもたちが家庭の状況(親が働いているかどうか)に関わらず、仲良く遊べる」という記述が多かった。保育所と幼稚園とに分かれていた場合には、保育園児と幼稚園児とが関わる機会はほとんどないことを考えると、合同保育によって地域の子どもたちが一緒に遊ぶ機会があるということは、保育者と保護者に大きなメリットとしてとらえられていることがわかる。(以下、点線で囲んだ記述は、保護者の自由回答からの抜粋)

- 多くのお友達と交流できる。
- 子ども自身が保育園児と幼稚園児と分け隔てなく、保育の時はいろんなお友だちと遊んでいる。

このような子ども同士の関係について記述してるもののうち、特に多かったものは、「異年齢児との交流」に関するものであった。すなわち、「今日の少子社会では身近に低年齢の子どもがいないために異年齢児と関わった経験のない子どもが多くいること、合同保育によって年下の子どものお世話などをする機会を得て、思いやりが育った」という内容の記述が目立った。幼稚園児にとっては、合同保育だからこそ体験できる貴重な機会となっているようだ。

○異年齢の子どもの交流が日常生活に無かったので、良かったと思う。小さい子を思いやる気持ちや、年上であるという責任を持った行動・気持ちがみられ、嬉しく思ったことがあった。

○保育園児は年齢は様々で、自分より下の子どもに対してお世話などをしたりして、自分はおにいちゃん、お姉ちゃんなんだという自覚と思いやりが育つ。

○一人っ子なので、小さい子の世話が出来たとき、とても喜んでいる。お兄さんになった気がする。

このように、今日の少子社会において子ども同士の多様な関わりを得ることに保育者も保護者も強い関心を示していること、さらに保育所と幼稚園の合同保育によって年齢や家庭状況によって分断されずに地域の多様な子どもたちが交流できるということが、大きなメリットとしてとらえられていることがわかる。

2) 気にかかる影響

しかし一方で、子ども同士の関係について、「保育園児同士、幼稚園児同士で固まりがちで気になる」という意見も多い。アンケート調査の結果でも、保護者の半数、保育者の1/3が「固まりがち」と回答している (pp.82-83, 図 21 図 22 参照)。さらに保護者に「合同保育が子どもに与える気になる影響」について自由回答で尋ねたところ (D 票-Q15)、次のような意見が記述されていた。

○保育園の子と幼稚園の子との降園後の遊びの交流などがほとんどなく、園の中でも分かれてしまいがちであるのでは…と思う。

○やはり、保育園児同士、幼稚園児同士で仲良くなりがち

○幼稚園児同士でグループ化してしまって、同じ友だちとしか遊ばなかったりすることがある。

○親から見るとやはり保育園グループができていよう見え、あまり遊ばないようだ。

○幼稚園児の子と一緒に遊びたくても、幼稚園児の子同士が固まっている気がして寂しそうなどときがある。

○長時(保育園児)と短時(幼稚園児)、それぞれグループができていると子どもが言っていた

○同じ部屋にしながら、保育園児・幼稚園児とに分かれてしまい、友だちになれる幅が狭くなる。

しかし、このように保育園児同士と幼稚園児同士で固まりがちかどうかは、園による差異が大きい。園別に見ると、保育者・保護者ともに「固まりがち」と感じている割合が高い園が7園、逆に保育者・保護者ともに「固まらない」と感じている割合が高い園は5園となっている。それ以外の園は意見が分かれる。

以下、固まりがちになる背景、固まらない背景について、検討していくこととする。

②保育園児同士、幼稚園児同士で固まりがちになる背景

合同保育の際に、保育園児同士、幼稚園児同士で固まりがちになる背景はどこにあるのか、自由回答と後述するケーススタディを基に、以下、考察をすすめていく。

1) 一緒に遊ぶ機会・時間

保護者の自由回答をみると、幼稚園児の降園後に遊ぶ友だちが、保育園児同士、幼稚園児同士に限定されることから、それぞれで仲良くなりがちになるという意見が記述されていた。つまり一緒に遊ぶ時間・機会の偏りを挙げることができる。最も多い“早帰り型”の園の場合、幼稚園児と保育園児とが一緒に保育を受けるのは、午前中の4～5時間程度である。その中にお支度や集まり、設定保育、給食の時間があることを考えると、保育園児と幼稚園児とが自発的に関わり、遊びを共有するという時間はごく限られてくる。一般的に幼稚園児は園での遊びの延長として、降園後に家庭を行き来して遊ぶ約束をするが、保育園児はその仲間に入ることはできない。逆に幼稚園児は、園で遊ぶ保育園児の仲間に入ることが出来ない。一緒に遊ぶ機会や時間の長さが違うこと、特に午後に遊ぶことができる友だちの範囲が保育園児同士、幼稚園児同士に固定化されることが、子ども同士の関係を偏りがちにしている理由の一つといえよう。これについて、保護者の自由回答には次のような記述が見られた。

- 幼稚園終了後、ほとんどお友達との交流があるが、幼稚園部のお友達のみに限られてしまうのが少し残念である。
- 降園時間が違うため、仲良くなっても幼稚園外で遊ぶことができないので、結局は保育園児の遊び方、幼稚園児の遊び方が違ってくる。
- せっかくお友達になったのに、園終了の時間が違うため、各家庭の行き来が全くできない。(降園後、一緒に遊ぶことができない)
- 園から帰って保育園児と遊びたいが、土日しか遊べないので、保育園児が取り残されているような気がする。
- 一緒にいる時間が異なるため、どうしても仲良くなる子どもが偏っている。
- 帰宅時間が同じ子ども同士がやはり仲良くなりがち
- 降園時間が違うので、「早く帰る子」と「遅い子」という違いから仲良しが限られてしまうのではないかと思う。
- 降園時間が違うので、遊ぶ約束ができない。
- 保育園児のお友達と一緒に家で遊ぶこと（お迎えの後）は難しく、せっかく園で仲良くなってもそれ以上親しくなれない。

○もっと遊びたいが、片方が帰ってしまい、続きの遊びは保育園の子だけとなる。

2) 午後の生活の分断

午後の生活が分断されることについて、もう少し詳細にみていくこととする。

後述するケーススタディで、次のような場面を取り上げている（以下、枠内は、園における観察とビデオ撮影によって得た場面）。

「事例8 保育園児と幼稚園児集団の座る場が分かれる姿（B園）」

ホールでの給食となるため、用意をしてホールに移動する。子どもは好きなところに座って食事をするのだが、男児は保育園児と幼稚園児で座る場がくっきりと分かれて座る

この園は“早帰り型”であり、幼稚園児は昼食後すぐに降園となる。降園前の昼食時に、上記のように幼稚園児同士で「今日、一緒に遊ぼうぜ」などの会話もたれるような群れができた。つまり一緒に遊ぶ時間の長さの違いによって仲良しが偏るというだけではなく、午後の時間を一緒に過ごす友だちを求めて、子どもたちは積極的・能動的に保育園児同士・幼稚園児同士の群れをつくることにつながる。そこには、相性や園での遊びの結果としてではなく、分断された午後の時間の遊びに向けて、保育園児同士、幼稚園児同士で固まっていく様子が浮かんでくる。

「幼稚園児の割合が多いと、子ども同士の関係が固まりがちとなる」というクロス分析の結果（p85, 図 25、図 26 参照）は、家庭を行き来して遊ぶことが一般化するほど、幼稚園児同士の関係が強まり、保育園児はその群れから疎外されるためと推測できよう。

さらに、このように幼稚園児が降園後に家庭を行き来して遊ぶ約束をしている場面を目の当たりにして、保育園児は羨ましいと感じている。例えば次のような保護者の意見がみられた。

○幼稚園の帰りに遊ぶ約束をしているのを見て、羨ましいようだ。
○幼稚園児のお子さんが保育が終わった後、遊ぶ約束ができるのを羨ましいと思っているようなので。
○幼稚園児の方が自由が利く（放課後お友達の家に行ける!）のは、羨ましいに決まっている!

このような寂しさ、うらやましさなどを共有していることも、保育園児同士で固まりやすい一因となっていると推測できる。

さらに、園で長時間を一緒に過ごしていることから生じる保育園児同士の共感関係やつながりの深さは、逆に幼稚園児に疎外感を与えることもあるようだ。保護者の自由回答には、次のような記述がみられる。

○保育園の子ども同士は長時間一緒なので、どうしてもかたまってしまい、次の日行くと、幼稚園の子は仲間に入れないなどある。

○保育園児は長い期間、一緒に過ごしているためか、やはり兄弟的な雰囲気が生じているようで、それが利点であり、また幼稚園児との境目を作っているように感じる。

“一体型（幼稚園児の保育時間が16時まで）”の園をみると、“早帰り型（幼稚園児は毎日13時30分から14時までの間に降園）”の園よりも、子ども同士の関係が偏らないと感じる割合が高くなる（p86, 図27, 図28参照）が、それはこのような午後の生活の分断が生じないことに拠ろう。“一体型”の園の幼稚園児は、午後の時間も園で保育園児と一緒に過ごす。午睡、おやつ、遊び、という共通のプログラムであり、16時以降に降園してから家庭を歩き来して幼稚園児同士で遊ぶということは考えにくいことから、保育園児と幼稚園児とはほぼ同様の生活経験を得ていると、考えることができよう。

3) 家庭環境の違い

特に“早帰り型”の園の場合は、保育園児幼稚園児の間に生活リズムや生活スタイルといった家庭環境の違いが生じ、これが子ども同士の関係を偏らせている側面もあるようだ。同じような環境や価値観の者同士で気が合いやすく、親しくなりやすいことは、ごく自然なことであろう。ただしそのように自然に…というだけではなく、合同保育によって保育園児が家庭環境の違いに直面させられることが、両者の関係に境界を作る要因となっていることもあると推測される。例えば、次のような保護者の自由回答がみられた。

○子どもに『うちは仕事をしていて』『君とこは早迎え』と現実を思い知らせている感じ。気持ちの上でライン・垣根を作っていて、実際子ども同士であまり遊ばない。

○長期の休み前や毎日のお迎えの時など、保育園児がうらやましそうにしている、それが幼稚園児に対するいじめにつながる。

合同保育の良さとして、多様な家庭環境を理解するという意見もあったが、一方で、保育園児が家庭状況の差異を許容することはまだ難しく、羨ましさや寂しさで情緒不安定になる、という意見もあった。これについては、次項「保育園児の情緒」で詳細に検討することとしたい。

4) 保育園児と幼稚園児の生活経験の違い

保育園児と幼稚園児の生活経験の違いが、自ずと両者の自己主張の強さや自己表現の違いとなって表れていることから、それぞれ類似の者同士で固まりがちになるという意見もある。保育園児は低年齢の頃より生活時間の大半を園で過ごしており、園は家庭に代わる場である。園においても家庭と同様の強い自己主張や葛藤を表現するため、親の保護下にいる時間の長い幼稚園児に比べて、「たくましい」「自立している」「自己主張が強い」傾向があるという。これに対して幼稚園児には、遠慮や戸惑いがあり、その違いから両者の間に距離ができる場合もあるようだ。このような両者の違いは、ヒアリングを行った3園と

もに共通した意見であり、また保護者の自由回答にも次のような意見が少なくなかった。

- 保育園児は園にいる時間が長いため、一人でできる（する）ことが、幼稚園児より先にしっかりとできるようになっている。
- 保育園児は2～3歳の頃から入っているので、園生活にも慣れており、また強い。
- 保育園児は園になれていてたくましいことが多いが、もまれることは悪いことではないと思う。
- 0歳から3歳まで先に入所してきた子と、4歳から初めて入園する子では、いろいろな面で差があると思う。また、子どものグループも固まりがちになる。
- 保育園児の方が長時間園にいるため、少し主のような感じで、幼稚園児は引いてしまうことがある。
- 力関係では保育園児の方がかなり強く思う。物の貸し借りなど、保育園児の顔を見ながら貸して欲しくても一人で取り込んでいるので、なかなか怖くていけない（一部の人）

ただしこのような表現の相違が生じるのは、保育所と幼稚園の本来の機能の違いに拠るといえよう。つまり、家庭養育を前提としている幼稚園児にとって園は社会生活を学習する場であるが、保育園児にとっては自分をさらけ出すことのできる安定できる生活の場でなければならない。“家庭”と“社会”とでは、自己の表現の仕方や内容が異なるのは、当然といえよう。

③「固まらない」背景

しかし、子ども同士の関係が固まりがちか、固まらないかについては、園ごとの違いがみられる。ここでは、保育者・保護者ともに子ども同士の関係が「固まらない」が「固まりがち」を上回っていた園、5園を取り上げて保護者の意見を検討し、「固まらない」要因を探ることとしたい。

なお、その他の園の傾向は、保育者・保護者ともに「固まりがち」が「固まらない」を上回る園が7園、保育者・保護者ともに意見が半々に分かれる園が2園、保育者は「固まらない」という意見が多いが保護者の意見が異なる園が2園となっている。

1) 過疎地における子ども集団の確保

保育者・保護者ともに子ども同士の関係が「固まらない」という意見が多かった5園は、過疎地（4園）か、少子化地域（1園）であることが特徴である。これらの園の保護者の自由回答には、子ども集団が確保されたことを積極的に評価する意見が記述されている。（「少子化地域」とした園は、園長を対象とする調査票の「過疎地」の項目に○はないが、「少子化地域」に○がついており、保護者の自由回答を見ると、子どもが極端に少ない地域であることが記述されているもの）

- 保育園、幼稚園合わせて19人しかいないので、少しでも多くのお友達と仲良く遊べるのはいいと思う。とにかく人数が少ないので、合同保育でないとかわいそうかなと思

う。

○とにかく人数が年々減っているため、また町に私立の園がないため、ほとんどの子が通っているので、バスで早く帰る子はいるが、それほど気にならない。

○町内では少子化現象で、幼稚園・矮躯園と分けると、子ども同士の関わりがなくなってしまうので、仕方がないと思った。

○この町は子どもの人数が少ないので、合同でなければ友だちも少なくなってしまうので、過疎化地域では合同でなければ大変だと思う。

○もし一緒に保育されていない場合、数が少なくなるし、出会いの場も広がらないので、一緒になってるのが良いと思う。

○近所に同じくらいの年齢の子どもがいないため、多くの友だちが出来、いろんな人がいるという経験ができる。

○この場合は町内の子どもの人数が少ないため、一緒に保育を受けることで、少しでも多くの友だちと生活できると思う。別々にしたら、運動会、遠足などの行事も寂しいものになる気がする。

つまり、過疎地域では、保育所・幼稚園とに分かれて保育をしたのでは、子ども数が少なくて集団としての活動が成り立たない。保育園所と幼稚園とを合同にして、まず、子ども集団を確保することが必要とされていることがわかる。

過疎地にあるこれら園の場合、その地域の子どもたちは全員一つの小学校、中学校へと進んでいく。このため、小学校入学後の人間関係が保育所と幼稚園に固定化しないように、集団生活の始まりからみんな一緒であった方がよい、という意見が目立った。つまり、就学後の事情を見通して、合同保育を評価する意見が多かったことも特徴である。

○子どもの数が減っているが、小学校になれば一緒になるんだから、一人でも友だち（自分と気の合う）が出来るので良いと思う。

○小学校に入学したときに、すでに知っているお友達が一人でも多くいることは良いことだと思う。どうしても溶け込むまでは、同じ幼稚園出身同士固まりがちなので、少しでもその集団が大きい方が良い。

○友だちの輪が広がるし、小学校に入学したときもみんな知っているので違和感がない。

○小学校にはいる前に一緒に保育を受けているので、慣れ親しんだ友だちと学校生活ができる。

○地域の同年代の子が全部一緒なので、小学校に入ったときもなじみやすい。

○気になるのは、保育園児同士・幼稚園児同士で仲良くなりがちなのは、実際にある。でも小学校に行くとみんな同じなので、悪くはないと思う。

2) “一体型”で幼保の区別がない

過疎地域の4園のうち3園は、保育園児と幼稚園児の基本保育時間（8時間、16時降園）が同じ“一体型”となっている。“一体型”の園では、幼稚園児も給食、午睡、おやつ、午後の遊び、と全く同一のディリー・プログラムで生活しており、保育園児と幼稚園

児の生活の違いはない。このような“一体型”の場合は、地域の子どもが区別なく平等の保育を受けていることが、高く評価されている。例えば、次のような保護者の記述が見られる。

- ここの場合は特に区別しているわけではなく、どちらも一緒に保育していくるので、非常に助かっている。
- 幼保一体の合同保育であり、降園時間も同じなので、遊びやその他区別されていないので、なんら影響はない。
- 合同保育を受けることで、保育園児と幼稚園児を区別して考えたことはない。同じ保育を受けているので、どの子も平等で良いと思う。
- 保育園と幼稚園の区別なくみんな同じに生活していることは良いと思う。
- 特別、区別なく一緒に生活を送っているので、子どもたちは何も感じず、生活できていると思う。
- 特別この子は保育園児、この子は幼稚園児と分けていることはないので、子ども自身に影響することはないと思う。
- 保育園だから幼稚園だからと友だちが分かれることもなく、先生も同じようにしてくれるので、問題はない。
- 今まで違いを感じる事など一度もなかったもので、合同保育に何も問題はないと思う。
- どちらがどうという区別がないと思う。

ただし、幼稚園児も含めて全員が16時まで園で保育を受ける“一体型”は、3園とも過疎地という地域事情がある。つまり、同年齢の友だちのいる家が遠く、幼稚園児が降園後に家庭を往来して友だちと遊ぶことが難しいという実態があり、このため、次に示すように幼稚園児であっても午後4時まで園で保育を受けて、“友だちと一緒に遊べること”が、支持されているといえよう。ここで断っておくと、“一体型”が公平な分け隔てのない保育だとしても、このような地域事情、あるいは母親が働いているなどの家庭事情がない場合に、合同保育だからという理由だけで、幼稚園児が園で保育園児と同様の長時間保育を受けることは、望ましいとはいえないであろう。さらにこれら“一体型”の園では、保護者の項目に記すように、幼稚園児の保育料について、不満がみられる。

- 少子化の中、また農業中心の田舎町特有の隣家との距離。そんな中で年齢を超えて遊び、その中から自分たちのルールができ、相手への思いやりも生まれてくる。また時には「ケンカ」もあり、とてもいいと思う
- 今の時代、家に帰っても近所にも同世代がいなかったため、遊びながらお互いに学び合うといいと思う。

このような過疎地では、親同士の結びつきも、保育園児・幼稚園児という区分以前に、同じ地域に住む住民同士として親密であり、生活スタイルや価値観などについても保育園児と幼稚園児の家庭の間に大きな違いはないと推測できる。さらに次の意見にみられるよ